国立国語研究所学術情報リポジトリ

On the Relationship between Auxiliary Words and Their Rising Tone in Expressing Questions at the End of Sentences in Modern Japanese

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-02-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮地, 裕, MIYAZI, Yutaka メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001709

文末助辞と質問の昇調

宮地　裕

目　次

はじめに
1　昇調の機能
2・1　降調と昇調
2・2　文末形式と昇調
3・1　文末の助動詞の昇調
3・2　終助詞の昇調
おわりに

はじめに

発話の音調には，分析すれば，すくなくとも数種類の，性質のちがうものがあるが，文音調として，社会的習慣のみとめられるものは，かならずしも多様なものではない。このうち，従来，論理的イントネーションと呼ばれているものは，その文の意義と，もっとも関係のふかいものであって，文の全体的な意図表現にあずかるものであるとおもわれる。日本語の文では，表現意図の決定に，もっともおおきなやくわりをはたすのは，いうまでもなく，文末述語であるから，その音調も，文末述語にもっとも明瞭にあらわれるが，かような，“文末述語に主としてあらわれて，文の意図表現に参与する音調”を，本稿では，「意図表現音調」と呼ぶ。

これに対して，いわゆる文中のイントネーションのうち，主として，息の切れ目，おおくは文節末または文節群末にあらわれるものは，文の全体的表現意図にかかわるよりは，むしろ，その文節または文節群を，なんらかの意味で，強調卓立しようとする情意の表出にあずかるものであって，従来，どちらかと言えば，インテンシティの面から，一往，プロミネンスとしてとらえ，これと不可分的に結合してあらわれる音調を，いわば従属物的に，とり出してきた。

しかし，これは，文音調の面からは，“文節末または文節群末に主としてあらわれて，その卓立に参与する音調”として重要視すべきものであろうとかんがえるから，「意図表現音調」に対して，筆者はこれを「卓立表現音調」と呼びたい。（ただし，これについて関説するゆとりを，本稿は，ほとんど持たない。）

一般に，文末は文節末でもあるから，文末には両者がかさなってあらわれうる。とくに，文が，ごくみじかくて，一語またはイディオム的表現であるばあいなどには，両者のみでなく，他の数種の音調が，現実には，わかちがたく一体となってあらわれることがあるが，本稿では，これらのうちの「意図表現音調」を，さらにそのなかでも「質問の昇調」をとりあげ，これと，文末の助詞・助動詞との相関を問おうとおもう。文論，とくに文成立論のために，文末音調をも考慮することは，意味のあることだとかんがえるし，とりわけ，「質問の昇調」は，この問題の解明のために，かなり有力な手がかりとなろうとおもうからである。

1　昇調の機能

昇調（“上昇の文末音調”の意に，本稿では，使用する。）が，質問の標識として，欠くことのできないことがある。たとえば，「モウ　カエル↗」《もう帰る？》のように，文に疑問をあらわす語がないとき，その文が質問をあらわすためには，普通は，昇調が不可欠であり，おなじ文の形式が，昇調をとるか，降調（“自然下降の文末音調”の意に，本稿では，使用する。）をとるかは，文全体の意図表現を，普通は，左右する。すなわち，昇調↗と，降調↘との対立が，ここでは，質問と判断叙述との対立に対応している，ということができる。ところが，一方，「イツ　カエル↗」《いつ帰る？》と，「イツ　カエル↘」《いつ帰る？》とを比較すればあきらかなように，文に疑問をあらわす語があるときは，昇調は質問の標識として不可欠なものではなく，昇調をとるか降調をとるかは，文全体の意図表現を左右するものではない。それゆえ，昇調↗と降調↘との対立が，ここでは，質問と判断叙述との対立に対応してはいない，ということができる。

この事実に対して，われわれは，すくなくとも二様の解釈を，ここに，とる

ことができるとおもわれる。すなわち，

(A) 昇調と降調とは，文形式に附加的に添えられる文音調の二種であって，その別が，文全体の表現意図の区別にやくだてられることがありはするけれども，附加的なものであるから，文形式のなかに，その標識となる語がないときにだけ，その区別が明示されて，意図表現のために，そのやくわりをはたすが，文形式にその標識となる語があれば，文全体の意図表現のために，必要不可欠な要素ではない。

(B) 昇調と降調との対立は，文形式と結合して文の表現意図を決定する文音調の対立であって，文形式とともに，文全体の表現意図を決定する要素である。それゆえ，とくに，文形式に意図表現のための標識となる語がふくまれるときにだけ，その対立の明示されないことがあるけれども，それはそのいずれかが，臨時的なかたちであって，文としては，つねに，昇調か降調かの型を持っているものである。

二つの解釈に共通するところは，文形式と文音調とを分析してかんがえる点であり，ことなるところは，(A)が文形式を中心として文音調を附加的・補助的なものとするのに対して，(B)は，文形式と文音調との結合が文の意図表現を決定するとして，両者を対等な要素とする点である。

文形式自体を，純文法論的にあつかう範囲・目的のためには，(A)の解釈で種種な現象を説明しうるところがあるし，説明しえないところは，純文法論の範囲を越えるものとすることができるであろう。しかし，本稿は，文の全体的意図表現のために，文形式と文音調との相関を問うことを目的とするものであり，とくに，「質問の昇調」という，一面では文形式を当然ふくみつつ，一面では文音調の一つであるものをとりあげる以上，必然的に，文形式と文音調との結合が文の表現意図を決定するという(B)の解釈をとるべきことが，もとめられるはずのものであるとかんがえる。

それゆえ，その主眼である質問の昇調に関する部分については，まず，“昇調は，特定の文形式と結合して，質問という意図表現にあずかる機能を持つ”とかんがえてよいとおもう。（ただし，昇調はこの唯一の機能を持つばかりである，というのではない。）かかる観点から，以下に，文末形式と昇調との相

関の事実を記述し，若干の解釈をこころみたいとおもうのである。

2・1　降調と昇調

さて，以下に，昇調を中心として論述するにあたり，一つの仮説を前提とすることを明示しておく必要がある。

一つ一つの発話段落が，さまざまな音調として実現することは，いうまでもないが，発話の音調自体は物理的・音響学的な，個別の事実にすぎない。意図表現音調は，意図との対応において，おそらくは，音韻論的対象となりうるであろうし，さらに，その音調の昇降については，昇降それ自体が問題なのであって，どの程度あがるか，また，あがらないか，（可能性としては，どの程度さがるか）ということは，おおきい特徴ということのできないものだろうとおもわれる。前述のごとく降調を規定すれば，これは，心理的・生理的に不可避な事実であるばかりでなく，感情をあらわにしない発話のためには，不可欠な条件であろうとおもわれる。これは，なお，一つ一つの発話のばあいは，単に，せいぜい音声学的事実にとどまるであろうが，これが特定の種類の発話においては，共通する一般的事実であるならば，それは一つの特徴である，と言わねばならないであろう。

同様のことは，昇調についてもあてはまるであろう。すなわち，多分，昇調は，質問や反問の意図表現音調に，その典型が見られるであろうが，そればかりでなく，あるいは論理的に接続助詞に当る機能として，ことばのとぎれないことを，相手に明示したり，感情的に相手へのやさしさとか，いたわりとかを明示したりすることがあり，ひろく昇調一般に，相手に対する配慮という，共通の機能があろう。降調では，一般に，かようなことがないのではないかとおもわれる。

さらに，もし，降調と昇調とが，意図表現音調として，ある程度の意図内容との対応を持つものならば，両者は，意図表現のための弁別的特徴であるということができる。おそらく，かかる特徴として，昇降両調を，とらえうるであろうという予想が，仮説として存在し，ここに昇調を論述の中心にひきださせたということができる。

2・2　文末形式と昇調

繁を避けて例示しないけれども，既述のところに，事実に関する多少の反省をくわえれば，以下の命題がなりたつことを知るのは，われわれにとって，比較的，容易なことである。すなわち，

(1) 文末の昇調は質問をあらわすことがある。

(2) 逆に，文末に昇調をとることができない文は，質問をあらわす文ではない。

(3) しかし，疑問の標識となる語があれば，昇調がなくても，質問の発話であることがわかることがある。

(4) すなわち，質問をあらわす発話の末尾は，かならずしも，昇調をとるものではない。

(5) ただし，質問をあらわさない文は，文末に昇調をとることができないというものではない。

上記五項に関し，以下，必要な細部に触れよう。

(1)項は，(5)項と相関し，“文末の昇調は，かならず質問をあらわすとは言えない”というところが重要である。たとえば，「モチロン　ヨクナイサ↗」《勿論よくないさ。》，「マア　イヤダ↗」《まあ，いやだ。》，「イクヨ↗」《行くよ。》など，いずれも，アクセントとしては，せいぜい，「ヨクナイサ」，「イヤダ」，「イクヨ」のごとく，副次的乃至準アクセントという観点で，とらえられようが，文音調としては，昇調のみとめられることがある。しかし，これらは，昇調でも，また，降調でも，文の表現意図にかかわるというよりは，むしろ，相手にその内容を押しつける度合のつよさがちがう，と見るべきものとおもわれる。すなわち，この昇調は，意図表現音調ではなくて，卓立表現音調であると解釈される。したがって，もし，ことがらを意図表現音調に限定するならば，(1)項は，「文末の昇調は質問をあらわす」と言いうる可能性があるが，これについては，のちに触れるところがある。

(2)項は，“質問をあらわす文は，かならず，文末に昇調をとることができる”というにおなじく，事実に相違するところもないであろう。念のため，附言すれば，反語の表現は質問ではない。それゆえ，一般に昇調をとらないが，反語が内包する内的疑問が，外的質問に転じたときにかぎり，一般の質問とおなじ

昇調をとることができる。

(3)項(4)項は，現実の種々の場面・文脈での発話にあらわれる事実であって，ために，前節にしめしたごとく，二様の解釈もうまれる一原因となるが，本稿では，(3)項(4)項は，発話の問題であるとかんがえ，文においては，“質問をあらわす文の文末は，疑問の標識がなければ（この条件については，のちに述べるところがある），かならず昇調をとる”とみとめたのである。もしも，発話と文とのあいだに，なんらかの意味での中間的性格の単位を設定するならば，(3)項(4)項は，おそらく，そこにおいて論じられることになろうとおもうが，いまこれについては述べない。（「言語生活」昭和34年3月号拙稿）

3・1　文末の助動詞の昇調

一般に，名詞・動詞・形容詞および形容動詞の語幹は，単独で述語となるとき，昇調をとって質問をあらわすことができる。「トンボ↗」《とんぼ？》，「イク↗」《行く？》，「ウツクシイ↗」《美しい？》，「シズカ↗」《静か？》のごとくである。ここには，これらが，種々の助辞（助詞・助動詞）を後置するときはどうか，まず，助動詞から見ようとおもう。

助動詞の語彙には，つぎのごときものがある。（便宜，「現代語の助詞・助動詞」（国立国語研究所刊）による。）

ウ　ゴトキ　サセル　ザル　セル　ソウダ　ソウデス　タ(ダ)　タイ　タル　デス　ナイ　ナル　ヌ(ン)　フウダ　フウデス　ベシ　マイ　マス　ミタイダ　ミタイデス　ヨウ　ヨウダ　ヨウデス　ラシイ　ラレル　ル　レル　ン(ム)

しかし，これらのうちには，文語的語彙（ゴトキ　ザル　タル　ナル　ヌ〔ズ〕ベシ　ル　ン(ム)）や終止形を欠く語彙（ゴトキ　ザル　タル　ナル　ル〔ンはントスの形のみ〕）があって，これらについては，質問の昇調を実現または想定することができないし，実際の発話に聞くこともない。で，これらを除外して他を，つぎの4類にわかつ。

(a)　カ　を後置することができず，また，質問の昇調をとることができないもの。

(b)　カ　を後置することはできないが，質問の昇調をとることができるもの。

(c) カ を後置することができ，また，質問の昇調をとることもできるもの。

(d) カ を後置することはできるが，質問の昇調をとることはできないもの。

この4類は，“カの後置”・“質問の昇調”の二条件の，可能と不可能との組み合せのすべてであるが，上記助動詞について，4類の別をみれば，つぎのようになる。

まず，“カを後置しえない”語彙は，ソウダ フウダ ミタイダ ヨウダ ダ であって，これらはすべて，“質問の昇調をとることがない”。したがってこれらはすべて(a)類に属して，(b)類に属する語彙はないことになる。さらに，ソウダ フウダ ミタイダ ヨウダ も，ソウ フウ ミタイ ヨウ 単独ならば，「オキソー↗」《起きそう？》，「オキルフー↗」《起きるふう？》，「オルミタイ↗」《起きるみたい？》，「オキルヨー↗」《起きるよう？》のごとくキ質問の昇調をとることができるから，ソウ フウ ミタイ ヨウ は，形容動詞の語幹と同類の性質を持つものであって，ソウダ フウダ ミタイダ ヨウダ が質問の昇調をとらないというのは，ダの機能によるとみとめられる。その意味で，(a)類にはダをあげれば足りる。（注1）

つぎに，(c)(d)類，“カ を後置できる”ものとしては，現に，のこるすべての助動詞が適格であり，その点では，区別がつかない。で，“質問の昇調”の可否をみると，“可能”な(c)類としては，セル サセル レル ラレル タイ ナイ ラシイ マス タ があり，これらは，上記二条件においては，名詞・動詞・形容詞・形容動詞語幹とえらぶところがなく，さらに，職能（語のうけつなぎ）上・活用上・機能（意味的やくわり）上，これら詞類ときわめて，あるいは，かなり，ちかい性質のものであるということが，すでに，たびたび言われており，ここでは，文末音調のうえでも，これらの語彙は，詞類に準ずるものであることを，指摘すれば足りるのである。

(d)類，質問の昇調をとりえないもので，カの後置可能なのは，ソウデス フウデス ミタイデス ヨウデス デス ウ ヨウ マイ であるが，このうち，ソウデス フウデス ミタイデス ヨウデス は，(a)類におけるとおなじく，デスをともなわないならば，質問の昇調をとることが可能であるから，質問の昇調をとらないというのは，デスの機能による，とみとめられる。つぎ

に，ヨウは，動詞活用語尾のほうへ，そのヨを附けてかんがえることもできるから，ウに準じてかんがえてよい。マイは，はじめに除外した語彙ほどではないだろうが，今日，すでに，やや口頭語的ではない。あるいは，「カレハ　リョコウニハ　イクマイ↗」《彼は旅行には行くまい？》，「ソンナコト　アルマイ↗」《そんなことあるまい？》などと，言えないでもないかもしれないが，やや普通ではないと，内省されるし，私は，いま，はっきりと聞いた記憶を想起しえない。カを後置するマイカについても，「…デハアルマイカ」など，やや，類型的表現に限定される傾向が感じられ，文音調などの問題の対象から除外してよい可能性もあるかとおもわれるが，いまは，便宜(a)類に入れておく。要するに，(d)類は，デス　ウ　マイ　にまとめられる。つまり，職能上，カを後置しうる助動詞のうちで，カにもっともちかく位置する不変化助動詞　ウ　マイ　と，ダに準ずる丁寧表現の判断辞デスとが，質問の昇調をとらない助動詞の下限であることをしめしていると解釈される。すなわち，(a)(d)類のすべて，ダ　デス　ウ　ヨウ　マイ　は，いずれも，意義上，確定性の判断をあらわして，質問の内包する不確定性の疑念と対立しているだけあって，質問の昇調をとらないのであろうと解釈されるのである。

（ダロウ　デショウ　タロウ　に代表される，いわゆる推量の助動詞ウも，この点からは，推定の助動詞というべく，判断そのものに疑念があるのではなくて，推定された判断があると解釈し，不確定性の疑念とは区別したい。それゆえ，推量の形式としては，ダロウカ　デショウカ　タロウカ　があるとかんがえるのである。なお，「…ダロー↗」「…デショー↗」「…タロー↗」の昇調，および，「…デス↗」の昇調の可能性，の解釈については，後述するところがある。）

3・2　終助詞の昇調

終助詞は，助動詞以上に，方言色を避けがたいが，ここには，ほぼ，現代東京方言男性語の終助詞とみとめうるものをとりあげ，上述助動詞と同様，文末での，その質問の昇調をしらべようとする。ここに，さきの(a)(b)(c)(d) 4 類の別を立てるならば，その(a)類にあたるものとしては，ゾ　ゼ　ワ　サ　ヨ　ヤ　トモ　をあげうるし，(b)類にあたるものとしては，ネ　ナ　をあげうるけれども，もともと，カを後置しうる終助詞は，引用の表現を除外すれば，存在しないから，(c)(d)類に該当するものはない。のみならず，助動詞とちがって，終助詞の

うちには，カを前置しうるものがあり，また，カ自体が問題となるから，一般に，終助詞については，カの前置後置を問うよりは，むしろ，質問の昇調の可否を直接問うほうが，分類として，当面の目的のために，より有効である。すなわち，

（a′） 質問の昇調をとることができない終助詞

ゾ　ゼ　ワ　サ　ヨ　ヤ　トモ

（b′） 質問の昇調をとることができる終助詞

カ　ナ　ネ

（a′）類終助詞は，職能から言えば，カ　とともに，ネ　ナ　に上位する終助詞のすべてであるが，たとえば，「オキルワ。」《起きるわ。》，「オキルヨ。」《起きるよ。》，「オキルサ。」《起きるさ。》，「オキルゾ。」《起きるぞ。》，「オキルゼ。」《起きるぜ。》，「オキルトモ。」《起きるとも。》，「オイシイヤ。」《おいしいや。》など，すべて，質問の昇調をとることはできない。反問の昇調をとることは，もちろん，できるが，一般に反問の昇調は，文末音調上の特徴として，文末形式との相関上，弁別的なものではない。なぜなら，すべての文は反問の昇調をとることができるからである。

カ　には，特殊な問題があるから，後述するとして，（b′）類のうちの　ネ　ナ　について見れば，これらは，間投性終助詞の機能を持ち，終助詞のうちで職能上，もっとも下位するのみならず，機能上，文の成立のためには必須の条件ではない。しかしながら，たとえば，「オキルネ↗」《起きるね？》，「オキルナ↗」《起きるな？》のごとく，昇調をとって，相手の確認をもとめるという，一種の質問をあらわしうることは，あきらかである。かような，確認をもとめる一種の質問とはなにか。上述の一般の質問との差異が，もしあるならば，それはなにか。これについては，大略，以下のようにかんがえる。

これには，意味論的な質問内容の差異の問題があるとおもう。ネ　ナ　をともなわない質問「オキル↗」《起きる？》は，“君（または彼）は起きるか？起きないか？”と，たずねているのであって，発言者が，自己の判断（“起きる。”または“起きない。”）のしかたそのものについて，相手の判定をもとめることをあらわす。“起きるか？起きないか？”という，選択を相手にもとめる質

問に延長しうるのは，そのいずれの判断をくだすべきかということ自体について，相手の判定をもとめるからこそ，できることである。これを，ネ　ナ　を後置して，「オキルネ↗オキナイネ↗」《起きるね？起きないね？》ということは，全然，不可能で，いずれか単独で，「オキルネ↗」または「オキナイネ↗」と言うばあいにかぎられる。ということは，この「オキルネ↗」は，「オキル↗」とちがい，すでに，発言者が“君（または彼）が起きる”という判断をとっているのであって，その判断のしかた自体について，とやかく言っているのではないことを意味する。つまり，「オキル↗」のように，判断のしかたについてその判定をもとめているのではなくて，自己の判断を相手が確認し，これに同意するかどうか，その肯否をもとめているのである。「オキルネ↗オキナイネ↗」と言うことができないのは，そのためであると解釈される。

ここで，「…ダロー↗」《…だろう？》類について触れることができる。服部四郎博士は，「ダローという形式は『ヤマダロー↗』《山だろう？》という質問文に用いられうる。しかしこの質問文は表現者の判定に関する諒解者の意見を尋ねる文だから，形式ダローは，やはり第一人称者の判定作用を表出すると考えられる」（「言語研究」32号）と述べられたが，この解釈は，上記「…ネ↗」《…ね？》の解釈と，ほぼ，同様のものと解される。しかし，私は，この「…ダロー↗」「…デショー↗」「…マショー↗」の質問の昇調については，たとえば，「ヤマダロー↗」は「ヤマダローネ↗」の　ネ　の質問の昇調が，ネ　のないために，ウ　に臨時的に附けられたものであって，ウ　は，やはり，本来は，質問の昇調をとることのない助動詞である，と解釈したいのである。

またここで，「…デス↗」《…です？》についても触れることができる。服部博士は，「ホントーデス↗」《本当です？》の質問の昇調をみとめられた（同前）が，これは，やや普通でないとおもわれる。「デス」が「ダ」という判断辞の丁寧表現としてよりは，丁寧表現の形容動詞語尾的にはたらくときは，その可能性がないでもないだろうが，純然たる名詞に後置するときは，まず無理なのだから，やはり，「デス」は，本来，質問の昇調をとらない助動詞であり，やや普通ではないが，「ホントーデス↗」とか，無理をおかして，「モー　ナゴヤデス↗」《もう名古屋です？》とか，言うとすれば，それは，前記「…ダロ

ー↗」に準じて，終助詞を欠くための臨時的な昇調，すなわち，このばあいは「ホントーデスカ↗」「モー　ナゴヤデスカ↗」の「カ」を欠くための臨時的昇調，と解釈したいのである。(注2)

とにかく，「オキルネ↗」と「オキル↗」との，意味論的な質問内容の差異は，昇調のネを後置するかしないかの問題ではなくて，判断そのものの質的な差異の問題である。すなわち，ネが質問の昇調をとりうるということは，これが質問の標識となることがあるにはちがいないが，判断の成否にかかわるのではなくて，相手の確認を要求する機能を持ちうることをあらわすのである。たとえ，ネ　ナ　が後置しても，カ　を前置するなら，「オキルカネ↗オキナイカネ↗」と言いうることは，「オキルネ↗」が「オキルカネ↗」とは異質であり，逆に「オキルカネ↗」が「オキル↗」と同質のところを持つ，ということをしめしている，とおもう。まさに，「オキルネ↗」の昇調は，「オキル↗」または「オキルカ↗」の昇調が，質問の標識であるばかりでなく，判断の未成立をしめし，発言者が自己の判断そのものについてまで，相手の判定をもとめる機能を持ちうるのと，対比されるものであるとかんがえる。

かくて，問題は，おのずから，のこる唯一の終助詞　カ　の機能にかかわってくる。カ　は，昇調をとりうるが，昇調のばあいも降調のばあいも，意義上，判断の未定，または疑念をあらわす標識である点で，疑問終助詞と言うことができ，質問という表現意図に，もっとも密接な意義的関係を持つところの，唯一の終助詞である。すでに論じたごとく（拙稿「文と表現文」国語国文285号），疑問文の最低成立条件としては，カ　の機能をふくむべきものと，純文法論的に解釈するし，この機能を持つならば，音調は附加的要素にとどまると言いうるが，本稿は，純文法論の範囲にとどまらないから，はじめに述べたごとく，文音調を必要条件とみとめる。カ　は，それ自体疑問の標識であるから，それにもかかわらず，音調上，昇調・降調のいずれをとるのが，一般的社会的な型であるかを決定することは，それだけでは，できない。この点で，他のすべての助辞と異質である。その決定は，したがって，質問の表現一般について，その文末音調上の体系的解釈にもとづかねばならない。ここに，その要点をのべるなら，つぎのごとくである。

ちょうど，「ダロー」「デショー」「デス」などが，本来，質問の昇調をとらないものだと解釈したのと，質的にはおなじく，そして，現象的には反対に，「…カ」の形式が質問をあらわすための本来の文末の文音調は，昇調でなければならない。すなわち，「モー　カエルカ↗」《もう帰るか？》などの型が，質問をあらわす「…カ」の文音調の特徴とかんがえられる。ということは，逆に「モー　カエルカ↘」《もう帰るか。》《もう帰るか？》が，単なる疑問文（質問をあらわす疑問表現文ではなくて単なる疑問文）であるにとどまるか，それでなければ，臨時的な発話である，とかんがえることを，ささえとする。すなわち，疑問終助詞カをともなう疑問文は，それ自体昇調をとるべき理由を持たないばかりでなく，意義上も，相手への配慮よりは，みずから発言者が自問するにとどまるばあいや，詠嘆にちかいと解されたりする事実は，これを《もう帰るか。》の意義において，降調と解釈させるのである。また，臨時的発話というのは，ちょうど，「カエル↘」が，場面・文脈のたすけによっては，《帰る？》をあらわすことがある，というのとおなじであって，「モー　カエルカ↘」が《もう帰るか？》をあらわすことがある，ということである。もしも，第1節に，まず述べた二様の解釈のうち，(A)をとるならば，カの解釈は，別の記述を要求するであろうことは当然であるが，本稿では，とらない。疑問詞　イツ　ドコの類の問題もこれにからんでいるのであるが，これについて述べるゆとりは，ほとんど，ない。現在，私は，疑問詞の問題もふくめて，上述したところの解釈のほうが，全般的に，無理がないとおもっている，と附記することにとどめる。

お　わ　り　に

以上，述べるところは，ほぼ，つぎのごとくである。文末助辞には，質問の昇調をとることのできるものとできないものとがある。また，おなじ質問の昇調をとるもののうちにも，質問内容の質のちがう文の文末構成要素であるものがある。大体において，職能上，詞にちかく位置するものほど，詞の質問の昇調と同質であり，詞にもっともとおく位置する間投性終助詞は，これと異質であり，この中間の助辞は，カ以外，質問の昇調をとることができない。文論，

とくに文成立論のために，文音調を参与させるばあい，とくに意図表現音調を考究する必要のあることは，まず，あきらかであるが，ここに，その体系的解釈の一端を述べて，ささやかな試論とするものである。

つたなく，また，いたらぬところのおおいものであることを感ずるけれども，大方の叱正高批を待つこと切である。

（注１）「…ダカ」という表現について。

「…ダカ」とは言わないと記したが，「ドコダカ　シラナイ↘」《どこだか知らない。》，「ナンダカ　ヘンダ↘」《何だか変だ》など，「疑問詞＋ダカ」の形はある。一方また，「ドコカ　シラナイ↘」《どこか知らない。》，「ナンカ　ヘンダ↘」《何か変だ。》ともいう。もともと，疑問詞は，「コノウチノ　ドコヲ　エラブトシテモ　メンドウダ↘」《この中のどこを選ぶとしても面倒だ。》，「ナニヲ　イッテモ　キカナイ↘」《何を言っても聞かない。》のように，文中の句においてならば，不特定なものごと（時・所・物・人）をあらわすことができ，むしろ，不定詞と言うのにふさわしい。つまり，ドコ　ナニ　の類は，“不特定なものごとをあらわす”のを中核の性質（「形式」の「意義素」）として持っていて，そこから展開して，「ドコデアルカ　シラナイ↘」，「ドコダカ　シラナイ↘」，「ドコカ　シラナイ↘」のような，意味上不定な判断の表現のなかで用いられ，さらには，「ドコデスカ↗」，「ドコダ↗」，「ドコ↗」などの質問の表現にも用いられるにいたる，と解釈される。それゆえ，ダカ　は，「ドコダカ　シラナイ↘」のように，“意味上特定の指示対象を持たない文中において，疑問詞（不定詞）に後置することによって使われる資格を持つ”とかんがえられる。「イイヒトダカ　ワルイヒトダカ　ワカラナイ↘」《いい人だか，悪い人だか，わからない。》のように，機能上，並立助詞　ダカ　に連続するのも，そのためであると解釈される。方言によっては，「ユキダカ↗」《雪だか？》という表現を持つものがあるが，これは，その方言においては，ダ　が東京方言におけるごとき明瞭な断定性の機能を持たないためであって，「モウ　カエルダ↘」《もう帰るだ。》という表現をも持つことと相関してかんがえられるものであろうとおもわれる。

本稿に，ダ　は“カ　を後置しえない”助動詞であるとしたについては，以上のような注記を要する。ただ，現象的には例外のごとくであるが，本来，文末の確定性判断辞　ダ　と，不確定性の終助詞　カ　とは対立する機能・職能を持つものであって，結合するについては，疑問詞の機能を媒介とするというような，それ相当の理由があるものだ，とおもうのである。

（注２）「…ダロー↗」，「…デス↗」について。

「イコー↗」《行こう？》というのは反問であって質問ではない。ウ　は質問の昇調をとらない助動詞であるから，ダロウ　も質問の昇調をとらないはずである。「ヤマダロー↗」《山だろう？》という質問の昇調を，“臨時的なもの”と解釈したのはそ

のためであり，また，これを「ヤマダローネ↗」《山だろうね？》の「…ネ↗」の略とみて，「…カ↗」の略とみなかったのは，ウ　の昇調が意味上，ネ　の昇調（確認要求）と同質であって，カ　の昇調（判定要求）とは異質であるためである。

これと似た事情にあるのが「…デス↗」《…です？》であるが，これには別の問題も含まれている。「モー　ナゴヤデス↗」《もう名古屋です？》が，やや無理な言いかただと感じる理由についてである。その解釈の一つはつぎのようである。これは本来，「モー　ナゴヤデスカ↗」で，その　カ　が略されたものである，略することはそんざいに言うことである，デス　は丁寧な表現であって，そんざいな表現と相反する，そこで無理な感じが生じる，と。待遇表現的観点を導入するのも，一解釈だが，「ヤマデショー↗」類を「ヤマデショーネ↗」の略とすれば，ここにも無理な感じが出そうなものだが，事実はそうではないから，統一的な説明がつかない。そこで，これは，つぎのように　ダ　と関係づけて解釈するほうがよくはないかとかんがえる。

「モー　ナゴヤダ↗」《もう名古屋だ？》とは(反問以外)質問として言うことができない。ダ　が，かように質問の昇調をとらないのは，判断辞としての　ダ　の機能によるのだ，とかんがえる。とすれば，デス　も判断辞としての機能においては同様だから，そのために「モー　ナゴヤデス↗」とは言わないのが普通なのである。これが発話に実現するのは，ほかにもよくある「…カ↗」の　カ　の省略という現象が，類推によって適用されるためであって，この類推の適用が，実は　デス　の持つ判断辞としての機能とは相反するものであるために，やや無理な感じを生むのだ，と解釈するのである。「…ダ↗」という類推の適用がないのは，もともと　ダカ　という形式が，註1にしるすように，特殊なばあい以外，ないためであり，「…デス↗」という類推の適用が比較的容易なのは，二音節という音節数にもよるであろう，とかんがえる。助動詞のうち，質問の昇調をとることができるのは，タ　以外，セル　サセル　レル　ラレル　タイ　ナイ　ラシイ　マス　すべて二音節以上であることを関係があろうとおもうのである。なお考察すべき点もあるが，しばらく註して高批を待つこととした。

(1958—10—31)